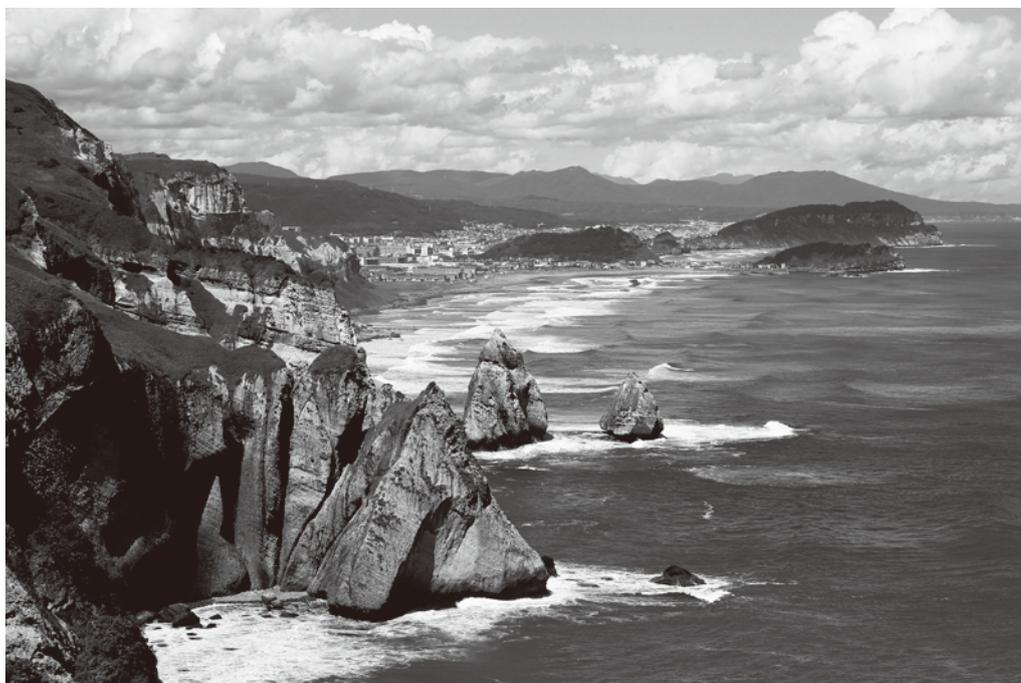


# 第62回 北海道医療ソーシャルワーク学会 ご案内



主催	一般社団法人 北海道医療ソーシャルワーカー協会
開催主管	一般社団法人 北海道医療ソーシャルワーカー協会 日胆支部
日程	2019年6月22日(土)～23日(日)
会場	蓬峯殿 〒050-0073 室蘭市宮の森町1丁目1番 TEL(0143)44-3338

問い合わせ先

第62回 北海道医療ソーシャルワーク学会 事務局

医療法人 登別すずらん病院 地域連携室 紙本雅也  
〒059-0027 登別市青葉町34番地9 Tel:0143-85-1000 直通Fax:0143-81-2023  
Email:m-kamimoto@suzuran-hosp.or.jp

# 第62回 北海道医療ソーシャルワーク学会

## ●大会テーマ

「医療ソーシャルワーカーの実践を社会に示すために我々がなすべきこと」  
～いま改めて実践を言語化する必要性について考える～

## ●大会趣旨

保健医療分野に医療ソーシャルワーカーがいることの意味や意義を、クライアントや機関内の多職種、地域共生社会の構築に関わるあらゆる人々にわかりやすくかつ説得力をもった形で説明する力が今私たちに求められている。果たして、私たちは自分たちの実践や存在意義を社会に対して適切に発信できているだろうか。あるいは、発信した情報が適切に社会に届いているだろうか。

診療報酬における社会福祉士の評価に象徴されるように、医療ソーシャルワーカーへの社会からの期待・要請は高まっている。一方で、「支援」よりも制度や組織が規定する「業務」に忙殺され、クライアントの権利や自己実現を保証する本来の役割が十分に果たせていない、効率ばかりが優先されて加算の算定件数が組織からの評価になってしまっているなどのネガティブな意見を多く耳にする。社会的な要請の高まりと反比例するかのようになり、医療ソーシャルワーカーの存在意義や魅力が薄れているという危機感さえ抱く。

しかし、私たちは危機や困難・課題を憂いてばかりの受動的な存在ではない。環境に働きかけ変化を促進する能動的な専門職である。社会からの期待に応え、真に評価を得るためには、医療ソーシャルワーカーの存在意義を見つめ直す原点回帰に止まらず、さらに一步踏み込んで我々自身が専門職としての実践を言語化し、社会に発信するアクションが必須ではないだろうか。

本学会では、ソーシャルワークがもつ変わらないもの・変えてはいけないものを再確認しつつ、社会や時代の要請に応じていく上で、今我々に求められる態度と具体的な行動について考え、理解を深める機会にしたい。



## ●後 援

北海道 室蘭市 (一社)北海道医師会 (一社)室蘭市医師会 (公社)北海道看護協会  
(公財)北海道健康づくり財団 (福)北海道社会福祉協議会 (福)室蘭市社会福祉協議会  
(一財)北海道難病連 (公社)日本医療社会福祉協会 (特非)北海道ソーシャルワーカー協会  
(公社)北海道社会福祉士会 (一社)北海道精神保健福祉士協会 (公社)北海道作業療法士会  
(公社)北海道理学療法士会 (一社)北海道言語聴覚士会 (一社)北海道介護福祉士会  
(一社)北海道精神障害者家族連合会 北海道認知症の人を支える家族の会  
(一社)北海道老人保健施設協議会 北海道地域包括・在宅介護支援センター協議会  
(一社)北海道介護支援専門員協会 北海道訪問看護ステーション連絡協議会  
日胆地区ソーシャルワーカー協会 (順不同)

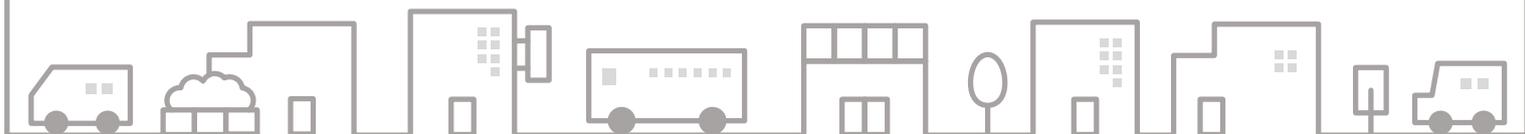
## ●学会プログラム

### 【1日目】 6月22日 (土)

9 : 00～ 10 : 30	10 : 45～ 12 : 15	13 : 00～ 15 : 00	15 : 30～ 15 : 55	16 : 00～ 17 : 30	17 : 45～ 18 : 45	19 : 00～ 21 : 00
自主企画	協会企画	定期総会	開会式	基調講演	シンポジウム	懇親会

### 【2日目】 6月23日 (日)

9 : 00～ 10 : 30	10 : 40～ 12 : 10	12 : 20～ 12 : 40
研究発表	教育講演	閉会式



## 現代医療の現実に対峙する 医療ソーシャルワーカーの立ち位置 ～求められる思考と今後の実践を探る～



講師：小西加保留 氏

● 略歴

- 1974年 関西学院大学大学院社会学研究科修士課程終了
- 1974年 兵庫医科大学病院医療社会福祉部ソーシャルワーカー
- 1997年 桃山学院大学社会学部社会福祉学科教授
- 2006年 関西学院大学社会学部社会福祉学科教授
- 2008年 同人間福祉学部社会福祉学科教授
- 2018年 京都ノートルダム女子大学現代人間学部福祉生活デザイン科  
特任教授  
博士（社会福祉学）

● 主な著書・論文

- 『ソーシャルワークにおけるアドボカシー - HIV/AIDS患者支援と環境アセスメントの視点から -』  
（単著）ミネルヴァ書房（2007）
- 『よくわかる医療福祉』小西加保留・田中千枝子（編著）ミネルヴァ書房（2010）
- 『HIV/AIDSソーシャルワーク 実践と理論への展望』（編著）中央法規出版（2017）
- 『権利擁護がわかる意思決定支援 法と福祉の協働』日本福祉大学権利擁護研究センター監修 平野  
隆之・田中千枝子・佐藤彰一・上田晴男・小西加保留（編著）ミネルヴァ書房（2018）
- 『権利擁護とソーシャルワーク』上田晴男・小西加保留・池田直樹（編著）ミネルヴァ書房（2019）

### 講演内容

地域におけるソーシャルワークの展開や医療ソーシャルワークへの期待を、これほどまでに感じさせる時代はこれまでになかったのではなかろうか？またそれ故にこそ、そうした「期待」にどのように向き合っていけばよいのか、それぞれの現場の悩みも深まっているように感じる。

ソーシャルワークの根本に立ち返って、我々はどのような根拠を基に、自らの立ち位置を重層的に描けばよいのだろうか。医療・介護の当事者を取り巻く実態を認識するアンテナ、医療・福祉の歴史を切り口とする課題の捉え方、医療者や政策・制度を取り巻く現実の解説、社会福祉学の理論や方法論からの考察など、その論点は多岐に亘る。

医療ソーシャルワーカーは、当事者に対してのみならず、メゾ・マクロシステムにおける自らの位置づけへの自覚の上に、必要且つ適切なアセスメントに基づく行動が求められる。この度の機会を、価値に裏づけられた知識・技術の蓄積の重要性を共に追究する場としたい。



## 『ソーシャルワーカーは専門職か？ ～ソーシャルワークの現在地とこれからを考える～』



講師：三島亜紀子 氏

● 略歴

兵庫県出身

2002年 会津大学短期大学部教員

2005年 東大阪大学教員

2014年 ケンブリッジ大学客員研究員

2016年 同志社大学嘱託講師（現職）

2017年 大阪市立大学大学院生活科学研究科 博士（学術学）

● 主な著書・論文

『社会福祉学は「社会」をどう捉えてきたか ―ソーシャルワークのグローバル定義における専門職像』勁草書房（2017）

『社会福祉学の〈科学〉性―ソーシャルワーカーは専門職か？』勁草書房（2007、第五回日本社会福祉学会奨励賞受賞）

『児童虐待と動物虐待』青弓社（2005）

『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅢ』（共著、「子どもの貧困」と児童文学―二宮金次郎ストーリーを超えて」担当）ミネルヴァ書房（2019）

『妖怪バリアーをやっつけろ！―きりふだは、障害の社会モデル』生活書院（2010）

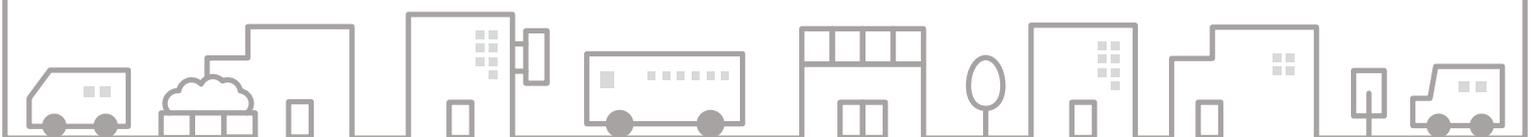
『かえってきた妖怪バリアー』生活書院（2019予定）

### 講演内容

福祉サービスの質の向上に関する課題、福祉関係の職場の労働条件の悪さを見聞したことから、ソーシャルワーカーの専門職化に関心を持つようになりました。もともと無償で行なわれていたケアを担う人員を専門家の地位に引き上げるために、当初、科学化が必要とされました。この萌芽期の専門職観を明確にしたうえで、理論的体系化とその後の反専門職主義の高まりを受けたソーシャルワーク理論の変化の過程を研究してきました。

2014年にソーシャルワークのグローバル定義が採択されてからは、「多様性尊重」や「植民地主義」、「世界各地に根ざし人々が集団レベルで長期間受け継いできた知」を指す「地域・民族固有の知（indigenous knowledge）」などを中心にその原理や概念について考察しています。講演では、これらの研究をもとにお話しさせていただきたいと思います。

いっぽうで、福祉に関する知見を分かりやすく人に伝えることの重要性を痛切に感じたことから、最近では教材としての絵本（漫画）づくりにも力を入れています。



# ● シンポジウム

6月22日（土）17：45～18：45

## 【開催テーマ】

『医療ソーシャルワーク実践の質をどう担保していくか』

## 【企画趣旨および目的】

当協会の活動は、医療ソーシャルワークの普及向上と医療ソーシャルワーカーの倫理、資質ならびに学術技能の研鑽を図り、北海道民の健康と福祉の増進に寄与することを目的としている。

一般社団法人化から5年の月日が経過し、入退院に関わる加算要件の設置や社会情勢の著しい変化が生じ、今まさにその在り方が問われているのではないか。

私たち医療ソーシャルワーカーが社会からの期待に応え、真に評価を得るためには、医療ソーシャルワーカーの存在意義を見つめ直す原点回帰に止まらず、さらに一步踏み込んで我々自身が専門職としての実践を言語化し、社会に発信するアクションが必須である。

実践力、高い質を備えた医療ソーシャルワーカーを組織的に育成しつづけることが求められ、その各々が実践の質を担保するには、職場、養成校、職能団体等が協働して取り組む必要がある。

ソーシャルワークがもつ変わらないもの・変えてはいけないものを再確認しつつ、社会や時代の要請に応じていく上で、今我々に求められる態度と具体的な行動についてそれぞれの立場から意見を交換し、理解を深める機会にしたい。

コーディネーター：梅木 秀俊（苫小牧市立病院）

シンポジスト：職能団体の立場

星野由利子 氏

（札幌麻生脳神経外科病院 / 北海道医療ソーシャルワーカー協会 副会長）

養成校の立場

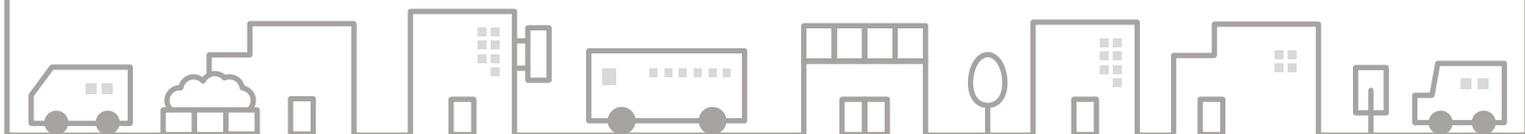
畑 亮輔 氏

（北星学園大学 社会福祉学部 福祉臨床学科 准教授）

職場の立場

行沢 剛 氏

（勤医協苫小牧病院）



## ● 研究発表①

6月23日（日） 9：00～10：30

**【演 題】** 「北海道医療ソーシャルワーカー協会キャリアラダー」の可能性  
～ソーシャルワーカーのキャリアデザインを描く～

**【発表者】** 松原 俊輔（医療法人愛全会 愛全病院 地域医療連携室）

**【共同研究者】** 木川 幸一（北海道がんセンター） 星野由利子（札幌麻生脳神経外科病院）  
上田 学（新さっぽろ脳神経外科病院） 保科 健（斗南病院） 田巻 憲史（帯広協会病院）  
下倉 賢士（札幌南徳洲会病院） 沖 隆一（天使病院） 外山 史教（開西病院）  
近藤みずき（北祐会神経内科病院）

### 【発表内容】

2019年度より、北海道医療ソーシャルワーカー協会キャリアラダー（以下ラダー）の運用が開始となる。当協会がめざすソーシャルワーカー養成（ジェネラリスト）の段階を明らかにしたもので、ソーシャルワーカーとしてのキャリアデザインを描くうえで重要な指標となる。

本ラダーは一人職場や、新人から経験年数豊富なベテランワーカーまで、セルフチェックのうえ自己のラダーレベルを設定し、自己学習かつ適切な研修を選定するための指標として活用できると同時に、バイザー・バイジー間でラダーレベルを設定、評価用シートを活用し、スーパービジョンを実施するといった職場内運用も可能なものである。当協会としては、運用開始初年度は主に、会員へのラダー普及を目的とする。

運用開始にあたり、2018年度に実施した試行的運用とそのアンケート結果、学識者へのコンサルトをもとに最終版として作成した本ラダーと、ラダーシステムに沿った研修体系の構築に至った経緯、今後の展望について述べる。

---

**【演 題】** 医療ソーシャルワーカーのワーク・ライフ・バランスに関する調査研究

**【発表者】** 内田紗葉子（小樽中央病院）

**【共同研究者】** 荒木 孝太（勤医協西区病院）  
岩本 弥子（イムス札幌内科リハビリテーション病院）  
村松 達哉（札幌宮の沢病院）

### 【発表内容】

当研究グループは、中央E支部新入会者が集まり、日頃実践を行う上での悩み等を共有しながら進めている。この話し合いの中でワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）をめぐる課題が共通した悩みとして挙げられた。

本研究では、医療ソーシャルワーカーが、労働上の価値観であるワーク・ライフ・バランスをどのように捉えているかを把握し、年齢や実務経験年数による価値の相違に着目する。その上でその相違が実践上でどのような影響を及ぼすのか考察したい。



**【演 題】** 入院後に身元保証人が不在となった患者への支援に対する一考察

**【発表者】** 岡村 紀宏（社会医療法人恵和会 西岡病院）

**【共同研究者】** 田附 悠子（西岡病院 医療ソーシャルワーカー）  
横田 法律（西岡病院 医療ソーシャルワーカー）  
西川 奈美（西岡病院 看護師長/看護師）  
澤田 格（西岡病院 内科医長/医師）

### 【発表内容】

当院は札幌市豊平区にある在宅療養支援病院である。

在宅、特別養護老人ホーム、有料老人ホームなどの介護施設の訪問診療も行っている。

近年、介護施設において、入所後に、身元保証人がご逝去等で不在となり、その後、代替りの身元保証人が見つからず、介護施設に入所を継続している例も多くある。

本事例は、80代・女性、慢性心不全の患者であり、当院入院後に、身元保証人が急逝し、厚生労働省のガイドライン及び当院の「看取りに関する指針」をもとに、以前の病状説明や相談記録をふまえ、主治医、弁護士をまじえて、退院支援を行った。

症例を通し、医療同意や意思決定ほか、退院・療養先においての様々な生活に至るところまで、細かく支援内容が行き届かなければ、身元保証人が未存在の方の支援とならないことがわかり、今後の当院ならびに当地区の課題となった。

なお、本事例は当院倫理委員会の承認を得るとともに個人が特定されないよう倫理的配慮を行う。

---

**【演 題】** 退院支援における在宅医療への選択  
～訪問診療同行後の選択肢の変化について～

**【発表者】** 黒澤 智尚（医療法人札幌手術センター 札幌麻酔クリニック）

### 【発表内容】

病院等で考える在宅医療の適用と在宅医療側が考える適用に関して認識の違いを感じるがあった。認識の違いにより、自宅退院が叶わなかった患者様がいる可能性も考慮し、在宅医療側の視点を周知することで自宅退院が増えるのではないかと仮説を立てた。また、退院支援において重要な役割を担うMSWに知っていただくことがより重要と考えた。

札幌麻酔クリニックの訪問診療に同行していただいたMSWを対象として、同行前後で退院支援にどの程度影響があったかをインタビュー調査を通し考察する。また、同行していないMSWにもインタビュー調査を行うことで、退院支援における在宅医療の選択に対する影響の差異も考察する。

認識の差異を考察することで、在宅医療への選択肢が広がり、一人でも多くの患者様が自宅退院できるよう病院等と在宅医療にて円滑な連携が図れる効果としても期待している。



**【演 題】** 組織的な入退院支援体制構築と効果的なソーシャルワーク実践

**【発表者】** 川端 毅（社会医療法人 北海道循環器病院）

**【共同研究者】** 片岡ひかり（社会医療法人 北海道循環器病院）  
田中奈津紀（社会医療法人 北海道循環器病院）  
安西 一平（社会医療法人 北海道循環器病院）  
笠間 沙織（社会医療法人 北海道循環器病院）

**【発表内容】**

近年、地域包括ケアシステム構築へ向けて、入退院支援の重要性は一層高まっている。2018年4月には、診療報酬と介護報酬の同時改定が行われ、報酬面においてもより実践的なソーシャルワーク支援が評価されるようになった。当院では、従来医療ソーシャルワーカーや退院調整看護師が入退院支援と医療介護連携の大部分を担っていたが、マンパワー不足により支援が行き届かないケースや支援不足となるケースが一定数あった。そこで、医療ソーシャルワーカーが中心となり、院内に医師、看護師を含む入退院支援プロジェクトチームを組織、入退院支援ツールの仕様や運用を抜本的に見直し、全入院患者を対象とした入退院支援体制の構築に取り組んだ。その結果、入退院支援関連の加算算定数やソーシャルワーク支援に与えた影響を調査し分析したためここに報告する。

● **研究発表②** ●

6月23日（日） 9：00～10：30

**【演 題】** 医療機関における相談援助実習生の患者面接についての一考察  
～実習指導者へのアンケート調査を通して～

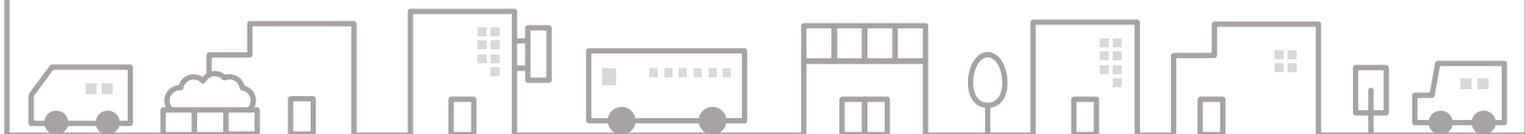
**【発表者】** 笠間 沙織（社会医療法人 北海道循環器病院）

**【共同研究者】** 片岡ひかり（社会医療法人 北海道循環器病院）  
田中奈津紀（社会医療法人 北海道循環器病院）  
安西 一平（社会医療法人 北海道循環器病院）  
川端 毅（社会医療法人 北海道循環器病院）

**【発表内容】**

当院では、相談援助実習生による患者との一対一面接を実習プログラムに位置づけ実施している。しかし、一部の医療機関では、患者へのリスクを懸念し実施しなかったり、実施に難渋したりしている現状がみられる。一方で、北海道内の養成校においては、実習前に患者面接場面を想定した実技試験（OSCE客観的実技試験）を実施している。養成校教員からも、患者との面接はできるだけ実施して欲しいと要望がある。

本研究は医療機関における実習生の患者面接の実施状況とその理由について、一般社団法人北海道医療ソーシャルワーカー協会の承諾を得て、「2018年度医療福祉実習受け入れ機関リスト」の医療機関（介護老人保健施設の含む）、依頼窓口担当者に対しアンケート調査を実施した。その結果と考察を含め報告する。



**【演 題】** 「医療ソーシャルワーカーのケースアドボカシーにおける組織内交渉の検討  
—「ロイヤリティのジレンマ」の克服に向けて—

**【発表者】** 高泉 一生（社会医療法人 北楡会 札幌北楡病院）

**【発表内容】**

医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）は、時にクライアントと組織とのコンフリクト（対立）の不可避を前提とした、組織の柔軟な対応や変革を求めるアドボカシーの実践に取り組んでいる。しかし、その実践は「ロイヤリティのジレンマ」と直面する可能性を持つため、決して容易なものではない。それでも尚、MSWはアドボカシーの実践を推進していくため、組織内交渉を実施することがある。そこで、15人のベテランMSWにインタビューを行い、20のケースアドボカシーにおける組織内交渉の事例を分析し、「ロイヤリティのジレンマ」の克服に向けた考察に取り組んだ。その結果、MSWのアドボカシーにおける「ロイヤリティのジレンマ」の克服には、クライアント、組織の「双方を擁護する道」、クライアントを「自らの立場も守りながら擁護する道」、「対立構造自体を取り除き擁護する道」の3つの道が、鍵となる可能性が考えられた。

---

**【演 題】** 「過疎地域に暮らす後期高齢患者が抱える生活問題の一考察」  
～自宅生活困難要因に関する医療ソーシャルワーカーへのインタビュー調査から～

**【発表者】** 保大木 直（松前町立松前病院）

**【発表内容】**

過疎地域において、医療提供体制の中核を担う公的医療機関では、若年層の人口流出と、超高齢化の影響から、高齢者の受診が目立つ。

過疎地域の公的医療機関において、医療ソーシャルワーカーは、多くの高齢者を対象として、疾病に伴って生ずる生活問題の解消を支援している。しかし、過疎地域では医療・介護のフォーマル資源が乏しく、潜在的な医療・介護需要を有している者も存在する。また、このように医療・介護需要を有している高齢者の中でも、生活問題を抱えている者は特に後期高齢者に多い。過疎地域では、生活問題が解消されず、生活困難に陥り、自宅生活を断念せざる得ない後期高齢患者の姿もある。

このような現状がある過疎地域において、後期高齢者が、最後まで希望に沿った自宅での生活を送る事が出来るよう、過疎地域に暮らす後期高齢患者の抱える生活問題を明らかにしていく必要がある。

そこで本研究では、過疎地域の医療ソーシャルワーカーを対象としたインタビュー調査を通じて、過疎地域に暮らす後期高齢患者の自宅生活を困難としている生活問題を明らかにしたので報告する。



**【演 題】** 歯科医療における医療・介護連携の実態に関する調査研究

**【発表者】** 吉野 夕香（北海道医療大学病院）

**【共同研究者】** 巻 康弘（北海道医療大学）

**【発表内容】**

**目的** 歯科医療機関と地域で高齢者支援を行う専門職との連携実態を明らかにすることを目的とした。

**対象および方法** 地域で高齢者支援を行う専門職向けの地区研修会（2018年11月）参加者89名を対象に、利用者の口腔課題、歯科医療機関との連携など15項目による自記式アンケート調査を実施し、同意・回答を得た77名の結果を分析対象とした。

**結果および考察** アセスメント時、口腔に関する課題を「常に考慮」14.5%、「症状に応じて考慮」65.8%と、回答者の8割が考慮していた。歯科医療機関との連携は「月1回以上」46.7%行われていたが、7割近くが「(あまり)十分ではない」と認識していた。その要因としては、「どんな時に連携してよいか分からない」53.2%、「歯科医師に連絡しづらい」40.4%が上位であった。歯科医療における医療・介護連携は、十分とは言えず、効果的な連携に向けた仕組みづくりが重要と考えた。

---

**【演 題】** 複合ニーズを持つ家族に対するソーシャルワーク実践の一考察  
～家族エンパワメントの視点から～

**【発表者】** 玉川 侑那（北海道大学病院 リハビリテーション部）

**【発表内容】**

地域を基盤としたソーシャルワークを行う際、福祉サービスや制度の充実の影で、複合的なニーズを抱え、パワーレスな状態に陥っている家族が増えている。

複合ニーズを持つ家族は慢性と危機によって特徴づけられると言われており、SWは家族に対して個別化し、家庭を基盤としたアセスメントを行う必要があるが、限られた環境や時間の中では家族が置かれている状況は見えづらい。

結果的に家族は「支援者」「介護者」として位置づけられ、潜在的なニーズが置き去りにされやすいが、家族の直接的支援の充実さが本人の支援の充実さに関連する事も先行研究等で指摘されており、医療から地域への連携を行う上で家族ソーシャルワークの視点は必要と考える。

今回、家族の複数が異なるニーズを抱えるケースを担当、本人の支援から家族全体のソーシャルワークに介入方法を再検討し、関わったソーシャルワーク実践について報告する。



## ● 自主企画

6月22日（土） 9：00～10：30

### 日胆地域における虐待対応の現状と、課題 ～私たちが整理すべき対応方法と機能、役割～

#### 【内 容】

虐待関連法が整備され、保健・医療・福祉等関係者の責務が明確化されている。その中で、我々MSWはどの程度支援体制や窓口機能に踏み込んでいるのか。胆振管内の現状を把握し、その課題をもとに情報共有、意見交換を行う企画である。

また、本来保険医療機関が行うべき対応方法や、機能、役割としてMSWに求められるものを明確にしていきたい。

そして、その情報共有や意見交換にとどまらず、関係機関との協議、体制構築に向け支部としての活動に反映できるような企画としたい。

#### 【問い合わせ先】

日鋼記念病院 志摩 瑞基 (mizuki.shima@nikko-kinen.or.jp)

## ● 協会企画

6月22日（土） 10：45～12：15

### 「北海道医療ソーシャルワーカー協会キャリアラダー」説明会 ～概要、活用方法について～

【発 表 者】 松原 俊輔（医療法人愛全会 愛全病院 地域医療連携室）

#### 【内 容】

2017年度より当協会にて構想を練ってきた「北海道医療ソーシャルワーカー協会キャリアラダー」が2019年度運用開始となる。協会全体へ普及できるよう、本ラダーの概要や運用方法について、実践例を用いながら説明する。また、会員へ配布予定のラダーハンドブックの活用や、一人職場やスーパービジョンを受ける環境にない方に向けた運用の方法・ラダー相談窓口についての説明も行い、本ラダー活用への一助となることを目的とする。

【グループ員】 木川 幸一（北海道がんセンター） 星野由利子（札幌麻生脳神経外科病院）  
上田 学（新さっぽろ脳神経外科病院） 保科 健（斗南病院）  
田巻 憲史（帯広協会病院） 下倉 賢士（札幌南徳洲会病院）  
沖 隆一（天使病院） 外山 史教（開西病院）  
近藤みずき（北祐会神経内科病院） 不動 宏平（真栄病院）

